衆に示すの機を逸したるは深く遺憾とする所なり、今ま本篇挿す所の寫眞中二三を除きの諸圖は皆な此の惠贈の寫眞及羅馬にて氏より贈られたる寫眞中より縮寫したるものに係る記して氏の深大なる好意に感謝の意を表す。

【附記三】　最後に三四の參考書を擧げんに、已に記したる Martha の L'art etrusque 及 L'archéoltogie etrusque e'roma'n の外、Dennis の Cities & Cemeteries in Etruria を以て最も概括的のものとす可し此の外 Boissier の Nouvelles Promenades archèologiqus 第一卷にコルチトの遺跡を記したる一章あり、頗る流麗の筆を以て面白く讀まる、又た Cameron 孃の old Etruria & Modern Tuscany は通俗の書なるも簡便なり、參考圖集としては Montelius の Civilisation primitiveen Italic 等あり、其他多くは一々の遺跡等に關する特殊の研究を記すのみ。（三月二日）

雜纂

朝鮮史の栞（第四回）

文學士　今西龍

廣史第一集より第八集まで百六十冊中第七集第一冊より第十八冊に至るまで十八冊を除きたる百四十二冊に收むる書籍次の如し。

第一集

1 野史之流　2 春坡日月錄 李星齡

3 黃兎記事 李廷馨

第二集

4 朝野紀聞 徐文重　5 錦城日記

6 休窩野談 任有後　7 聽松遺事 成逵

8 耳目所及 申欽　9 公餘雜載

10 朝鮮風俗 李凌慶　11 磻溪雜識 柳馨遠

第三集
13 野史初本 李植
14 重峰朝天記 趙憲
15 然松雜記 權得己
16 觀時錄
17 己丑事蹟 黃赫
18 慕堂日記 全
19 懲毖錄 柳成龍
20 筵中說話 尹卓然
21 登己日錄
22 涉亂事蹟 姜沆
23 壬辰遺聞 閔鼎重
24 辨誣私記 尹推
25 己卯遺蹟 安邦俊
26 隴西記事 李永成
27 文谷行錄 金昌翕
27 文谷臨命日記 全
28 乙巳傳聞錄
29 鄉兵日記略
第四集
30 於于野談 柳夢寅
31 明倫錄
32 示兒代筆 李植
33 敘後雜錄 李植
34 西征錄 洪翼漢
35 北行錄 全
36 白沙雜記 李恒福
37 白沙雜著論辨 安邦俊
38 默齋日記 李貴
39 谿谷漫筆 張維
40 清江思齋錄 李濟臣
41 清江詩話 全
42 玉溪破顏錄 李貞敏
第五集
43 東文問答 金春澤
44 凝川日記 朴興賢
45 筵中講啓 朴世采
46 隋筆錄 全上
47 正庵雜記 李顯益
48 石室語錄 尹宣舉
49 瀋館錄
50 六吾堂日記 鄭慶欽
51 南溪遺事 朴世采
52 沙溪筵席問對
53 沙溪語錄 宋時烈
54 北軒雜說 金春澤
55 朝天記聞 李恒福
56 漢陰言行錄 李貴
57 南冥行錄 金宇顒
58 卯丁日記 吳健
第六集
59 稗官雜記 魚叔權
60 李氏西征錄 李純
61 丙辰丁巳錄 任輔臣
62 戊午黨籍錄 柳成龍
63 史禍顚末
64 筆苑雜記 徐居正
65 諛聞環錄 曹伸
66 龍泉談寂記 金安老
67 青坡劇談 李陸
68 陰崖日記 李耔
69 秋江冷話 南孝溫
70 師友名行錄 全

71 思齋撫言 金正國
73 侯鯖瑣語 李濟臣
75 松江時政錄 鄭澈
77 白野紀聞 趙錫周
第七集 二十册中十八册缺
78 征倭雜志 申欽
80 鶴山樵談 許筠
82 師友鑑戒 全上
第八集
84 宋門記述
86 構禍事蹟 宋時錫
88 黃江問答
90 芝湖編錄
92 辛己盡變
94 農巖雜識 金昌協
96 我我錄
79 留齋行年記 李廷馥

72 己卯党籍錄 金正國
74 東閣雜記 李廷馨
76 石潭日記 附經筵日記 李珥
79 王人姓名記 申欽
81 牛山答問 安邦俊
38 買還答問 全上
85 尤庵雜記 宋時烈
87 幄對說話
89 松江行錄 金長生
91 艮齋漫錄
93 竹泉問說 李德泂
95 三淵雜錄 全上
附 龍門問答
98 遯齋日記 李溍

99 壬辰遺事 趙錫
101 疎齋漫錄 李頤命
附 江都三忠傳
彊域關防說
103 松窩雜說

100 壽春雜記 李廷馨
附 魏義士傳
102 燕行雜識
喪札定式
良役變通議

以上は朝鮮叢書中の最良書といふべき廣史の收輯せる書目にして他の諸叢書に收むるものと重複せるものあり、此種の稗史小說の類は傳寫の際省略脫漏せる條項少なからず其本其本によりて記事の量に異同あること少からず東洋時報に掲載せる小生の朝鮮書籍解題に其二三を說き置けり就て見られたし而して此の種の書籍は其著者の文集中に收めしものもあれど然らざるもの多く加ふるに寫本を以て少數の讀書界に傳はりしものなるを以て一たび散逸すれば之を得る事難し。

李朝近代百年間の書を收輯する叢書は余の管見

によれば未だ見ざるなり、此時代の前半は清朝考証學風の影響を受けて朝鮮の學問は狹隘ある經學繼傳の範圍外に一歩を出し學問の疆域新しく開拓せられたる時代にして多くの良書出でたり、其後半は即ち李太王時代にして國家衰退の際なるを以て之を收輯して叢書と成すが如き士人少なかりしならんか或は其人二三ありしとするも其書傳らざるか或は尙ほ世に出でざるか。

野史小說の類は往々貴重なる史料を含む、殊に朝鮮に於けるが如く史料の種類存否の分量上よりして君王身邊の日記や官府記錄の類を以て史料の大部分となさざるべからざる國の歷史研究に於て然り、野史小說の既に散逸せるもの少からざるも今更に悔みても詮方なし、現在散逸しつゝあり亦散逸の恐あるに於きては之を保存すること急務なり、然り而して保存の方法は之を世に廣むるにあるのみ之を刊行するの他に途なし。

第二章　地誌類

朝鮮地理の研究には三國及新羅王朝代に就きては三國史記地理志と典據とす、而して日本支那の史籍の記事が時に此地理志以上の貴重なる史料を供すること論なし、王氏高麗朝より李氏朝鮮の初期に亘りては世王宗實錄地誌、高麗史地理、東國輿地勝覽あり、尙ほ李朝初期に成りし地理書には慶尙道地誌の類あり、此地誌類を添削し集成せるもの前記の實錄地理誌なれども其に未だ世上に流布せず加ふるに其記事中地方沿革に屬するものゝ如きは輿地勝覽に誌せるを以て一般の研究には勝覽によりて不可なし、高麗史地理は輿地勝覽郡縣沿革の條と撰者を全うするを以て彼此相用ゐて信を稽ふべきにあらず、東國輿地勝覽に繼ぎて增補文獻備考中に輿地考あり、官撰の地誌として此兩書或る意味に於て朝鮮の地誌を完成す、但し城郭烽燧、驛站に付きては高麗史兵志、文獻備考兵考

を併せ見るべし、王氏高麗國都及び宋高麗の交通路研究には宣和奉使高麗圖經最も貴重すべし、朝鮮一般地理を論述せるものに李重煥の八域志あり擇里志、東國山水錄、總貫等の別名あり廣く世に行はれ我國にても明治初年一部分の直譯出版あるに至れり、朝鮮地理を說くこと簡潔にして明快なり一讀を要す、東國名山錄山經道里考等亦參考すべし。

地方誌には郡縣必ず邑誌あり各道には此邑志を聚成して一括とせるが如きものあり、邑志類の世に行はるゝもの新羅の故都慶州の東京雜記、高句麗の故都にして王氏高麗の西京たりし平壤の平壤誌一名西京誌、王氏高麗の故都開城の中京誌一名松都誌は有名にして總稱して三京誌の名あり、其他咸興の咸山誌、義州の龍灣誌、廣州の南漢志、江華の江華誌、濟州の耽羅志等邑誌中比較的完備せるものとして著明なり、各道の邑志を聚成せるものに北關志、嶺南邑、誌湖南邑誌、錦城括覽等あり其編纂の方法年代等によりて價値一ならず。

地理の考証研究には丁若鏞の我邦彊域考、柳得恭の四郡志、韓鎭書の海東繹史續地誌、李瀷の僿說類選地理門、安鼎福の東史綱目註及び前記の增補文獻備考輿地考あり、新研究には滿鐵調査部の朝鮮歷史地理、及東京帝國大學の滿鮮歷史地理研究報告あり史學雜誌、東洋學報、東洋時報、藝文等に出でたる諸論文あり。

地圖は邑誌等に附せる各郡縣地圖などを個人の所好に從て輯成せるもの甚だ多く精密粗漏正確誤謬の各々差あり其名も好みにまかせて命ぜるものにて名同うして內容異り內容同うして名異るを常とす、然れども源流遠く古地圖より出で之に後世實測の地形を以てせるもの亦少からず、成書としては靑邱圖、大東輿地圖廣く行はれ互に優劣の點あり、大東輿地圖は刊本あれど傳本稀少なり、而

して陸地測量部の東亞輿地圖(百五十萬分一)と五萬分一圖とは必ず備ふべきものなり。

以上は普通一遍の調査者の一覽せざるべからざるものにして其一二を除きては閲覽購求容易なるものなり、地理書及び地圖の書史は「朝鮮史の栞」の如き所謂「栞」に於ては記述の範圍を超ゆるが故に之を誌さず次に前記諸書に就て簡單なる說明をなすべし。

春日版雕造考

大屋德城

世に春日版と稱する古刻書の一種あり。南都興福寺にて雕造したるものに係る。其の春日版と稱するは、興福寺と密接の關係を有する春日明神に因みて起りしものなるべく、從ひて其の雕造の趣旨は一に春日明神の法樂に供へ神威を增さんとするにありしこと疑ひを容れず。建仁刊成唯識論の跋に云く。

爲報春日四所之神恩敬彫唯識十軸之論模爲聖朝安穩天下泰平興隆佛法利益有情矣建仁元年八月十三日始之至同二年六月廿日其功畢施入沙門要弘

又承久刊成唯識論の跋に云く。

願繼應理宗法命　久惜春日靈威光　速生有情類慧解　皆共必得龍花益

春日明神は慈悲萬行菩薩として、興福寺の法燈擁護の神明なりと信ぜられ、本地垂跡說の大成するや、一宮は本地不空羂索、二宮は藥師如來、三宮は地藏菩薩、四宮は十一面觀音、若宮は文殊(又四宮の如し)と稱せられたり。(大乘院と一乘院とに於いて各別の口傳あり。)(興福寺濫觴記)而して、興福寺は北寺と呼はれ元興寺の南寺に對して法宗相の重鎭(法相燈明記)たりしかば、春日明神は又法相擁護の神明として、上流信仰の中心たるの觀あり。故に春日の神威を惜む